

小 児 科

I プログラムの名称

慶應義塾大学病院 小児科初期臨床研修プログラム

II プログラムの指導者

統括責任者

慶應義塾大学医学部小児科学教室 (2022年3月現在)

教室主任 高橋 孝雄 教授

研修医担当主任 新庄 正宜 専任講師

慶應義塾大学病院卒後臨床研修センター (2022年3月現在)

明石 真幸 センター員 小児科医・産婦人科医育成コース プログラム副責任者

木実谷 貴久 センター員

III 慶應義塾大学病院小児科初期臨床研修プログラムの概要・特徴・特色

小児の疾病構造の変化に伴い、小児診療の重要性は感染症などの急性疾患に加えて、内分泌疾患、先天性心疾患、神経疾患などの慢性疾患においても高まってきた。さらに1990年代以降に少子化が社会問題となり、小児をとりまく社会、学校、家庭環境は激変し、子どもの心の病気も増加した。また、かつては救命し得なかった疾患が克服され、種々の疾患をもつ子どもたちが成長し、親となって自らの子を持つ時代になった。このような時代背景のもと、小児の保健・医療に関わる問題が多様化し、小児医療の役割は子どもの疾患を「治す」ことだけではなく、子どもを健全に「育てる」ことにもあると認識されてきた。現代の小児医療には、子どもの体と心を健康に育成し、次世代に伝達することを目標とする新しい医療体系、すなわち「成育医療」が求められている。本プログラムは将来小児医療に携えることを目指す研修医はもとより、成人医療など他の専門分野を目指す研修医にも有意義な臨床研修を提供し、医師をめざすすべての者が、子どもたちの代弁者(advocate)としての役割を果たしながら、小児診療を分担できる能力を獲得することを目標としている。

また、2020年度からの臨床研修の制度改正においては、小児科の実務研修の方略として、「小児の心理・社会的側面に配慮しつつ、新生児期から思春期までの各発達段階に応じた総合的な診療を行うために、幅広い小児科疾患に対する診療を行う病棟研修を含むこと。」となっている。このため、4週間(以上)の研修期間の間に、特定の小児分野のみならず、広い分野を研修することが必要である。

当科には、専門班ごとに行われる通常の回診の他、以前より「カルテを用いない、検査の話をしなない」教授回診がある。これは、1)症例のポイントを口頭で簡潔に伝えるスキルが大切であること、2)検査については触診・聴診・打診ですら、医師の考えが正しかったかどうかの確認手段のひとつにすぎないこと、の2点を強調するためである。特に後者については、昨今の新型コロナウイルス感染症の流行を機に、問診や視診など、患児に触れずに有力な情報を得ることの重要性が再認識されている。

慶應義塾大学医学部小児科学教室がプログラムを作成し、慶應義塾大学病院卒後臨床研修センターがプログラムの管理・運営を担当する。プログラムは病棟研修(一般病棟、新生児病棟)、外来研修、院外研修(島田療育センターおよび二葉乳児院、いずれも2022年3月現在、新型コロナウイルス感染症の影響により休止中)、症例検討会およびクルズスへの参加(WEBを含む)などにより構成される。プログラム指導者(下記)は必要に応じて、小児科学教室関連病院医長会を開催し、研修内容の評価、再検討を行う。

IV 到達目標

1. 前書き

すべての研修医が社会における小児医療および小児科医の役割を理解し、救急医療を含む小児のプライマリ・ケアを行うために必要な基礎知識・技能・態度を修得する。病棟や外来における臨床研修に加えて、オプションの研修として乳児院や療育センターでの研修（2022年3月現在、新型コロナウイルス感染症の影響により休止中）を設けることにより、目標の達成を促す。

- 1) 小児の特性
 - 2) 小児の診療の特性
 - 3) 小児期の疾患の特性
- を学ぶ

2. 到達目標

1) 児・家族、医師関係

- ・ 児を全人的に理解し、児・家族と良好な関係性を確立する。
- ・ 児・家族と医師とが相互理解を得るための話し合いができる。
- ・ 守秘義務を果たし、児のプライバシーへの配慮ができる。
- ・ 成人とは異なる子どもの不安、不満について配慮ができる。
- ・ 小児の医療・保健を通じ、子どもたちの代弁者（advocate）としての役割を認識できる。

2) チーム医療

- ・ 多専門職と連携し、全人的な医療を実施することができる。
- ・ 小児科上級医・他科医に適切なコンサルテーションができる。
- ・ 同僚医師、後輩医師への教育的配慮ができる。

3) 問題対応能力（Problem-oriented and evidence-based medicine）

- ・ 児に関わる問題点を解決するために情報を収集し、その情報を評価し、当該児への適応を判断できる。
- ・ 病態を当該患児の全体像として把握し、一貫した治療計画の策定ができる。
- ・ 小児科上級医・他科医に児の疾患の病態、問題点およびその解決法を提示でき、かつ議論を通じて適切な問題対応ができる。
- ・ 関係機関の担当者と共に適切な対応策を構築できる。
- ・ 当該児の症例提示・討論ができる。

4) 安全管理

- ・ 小児医療現場における安全の考え方、安全管理の方策を身に付ける。
- ・ インシデント発生後の対処について、マニュアルに沿って適切な行動ができる。
- ・ 感染症について院内感染対策を理解し、実行できる。

5) 予防医学

- ・ 親の育児不安に対して適切に支援できる。
- ・ 子どもの心身症の予防と早期発見ができる。
- ・ 親子相互作用の観察による愛着障害の発見、および成長曲線を用いた社会心理的ストレスの早期発見ができる。
- ・ 予防接種について説明できる。

V 研修方略

1. 経験目標

- 1) 医療面接
 - ・家族への指導を適切に行うことができる。
- 2) 小児の診察
 - ・診断を適切に行うことができる。
 - ・十分な問診を行い、病態を推測したり、鑑別疾患をあげたりすることができる。
 - ・日常しばしば遭遇する重要所見についての確かな診察ができ、直ちに行うべき検査および治療について計画を立てることができる。
- 3) 臨床検査 小児への身体的、精神的負担、侵襲に配慮しつつ、必要な臨床検査を計画することができる。基本的な臨床検査については、自分で実施することができる。下記の検査に関して小児特有の病態、小児の基準値を考慮した解釈ができる。
- 4) 基本的手技 小児の検査および治療の基本的な知識と手技を身につける。
- 5) 薬物療法 小児に用いる薬剤に関する知識と使用法を身につける。
- 6) 成長・発育と小児保健に関する知識を修得する。
- 7) 小児特有の症候・病態・疾患を経験する
 - 1) 一般症候
 - 2) 分野別疾患
 - a. 新生児疾患 b. 乳児疾患 c. 感染症 d. 呼吸器疾患 e. 消化器疾患
 - f. アレルギー性疾患 g. 神経疾患・発達障害 h. 腎疾患 i. 循環器疾患
 - j. リウマチ性疾患 k. 血液疾患・悪性腫瘍 l. 内分泌・代謝疾患 m. 精神保健
 - n. 先天異常・遺伝性疾患
- 8) 小児の救急医療・集中治療を経験する。

2. スケジュールと研修期間

研修期間は原則1か月以上で上限は問わない。選択期間、個々の研修医の希望、能力を参考に、配属部署を決定する。

1) 病棟研修 (2022年3月現在)

病棟医長が研修を統括する。主治医(指導医、専攻医)および学生とともに診療チームを形成し、数人の入院患者を受け持つ。

<週間スケジュール(例)> 勤務時間内: 下記以外は病棟実習。勤務時間外は自由参加。

月)	08:00	心臓回診
	12:30	長谷川教授回診
火)	15:00	精神保健カンファレンス
	夕方	抄読会・勉強会(WEBを含む)
水)	10:00	精神保健カンファレンス&精神保健回診
	夕方	心臓カンファレンス
木)	08:00	心臓回診
	14:00	血液回診
金)	13:30	高橋教授回診
	回診後	複合班カンファレンス
	夕方	クルズス
毎日)		PICUカンファレンス 専門班別小回診

2) 外来研修 ★は「一般外来研修」に含むもの

外来医長および外来指導医が外来研修を統括する。予診、初診、再診、健診・育児相談、予防接種、専門外来（神経、内分泌・代謝、循環器、精神保健、腎臓、呼吸、感染、免疫アレルギー、血液・腫瘍、遺伝、新生児）が含まれる。予診をとった患者の外来診療に継続して立ち会うなど、ひとりの患者を縦断的に診ることを重視する。外来研修中は原則として入院患者を受け持たない。

<週間スケジュール（例）> 勤務時間外は自由参加。

	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5・6・7
月	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	専門外来	休憩	特診初診外来★	特診初診外来★	新生児外来		
火	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	専門外来	休憩	特診初診外来★	特診初診外来★	専門外来		勉強会（WEBを含む）
水	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	専門外来	休憩	特診初診外来★	特診初診外来★	予防接種		
木	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	専門外来	休憩	特診初診外来★	特診初診外来★	乳児健診		
金	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	専門外来	休憩	教授回診/クルズ				
土	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	予診・初診・再診外来★	専門外来	休憩	(2022年3月現在)				

★医師臨床研修指導ガイドラインー2020年度版ー https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/ishirinsyokensyu_guideline_2020.pdf

一般外来研修とは、「大学病院や特定機能病院等においては、主に紹介状を持たない初診患者あるいは紹介状を有しているも臨床問題や診断が特定されていない初診患者を担当する外来を指し、また地域医療を担う病院においては、上記に加えて特定の臓器でなく広く慢性疾患を継続診療する外来も含まれます。」とされている。

3) 小児科院外研修（2022年3月現在、新型コロナウイルス感染症の影響により休止中）

希望者は島田療育センターおよび二葉乳児院において、心身障害児や親のいない子どもの養育について学ぶことができる。

4) 小児科勉強会（WEBを含む）（2022年3月現在）

研修医は、全研修期間を通じて小児科勉強会（週1回）、小児科クルズ（概ね週1回）に参加する。これら勉強会へ参加することにより、主要な小児疾患の病態、診断、治療等に関する理解を深める。勉強会には慶應義塾大学病院初期臨床研修医全員が参加可能である。勤務時間外に行われる場合には、自由参加とする。

VI 研修評価

オンライン臨床教育評価システム（EPOC2：<https://epoc2.umin.ac.jp/epoc2.html>）にて、評価票ⅠⅡⅢの研修医評価、指導医評価、メディカルスタッフ評価（看護師含む）を実施する。経験すべき疾病・病態を当診療科にて経験した場合は、病歴要約の提出を確認し、EPOC2にて承認を行う。2年間の研修修了時には、評価票ⅠⅡⅢの各評価がレベル3に到達するよう指導を行う。これらは、最終的には各研修医の責任指導医により卒後臨床研修センターに報告される。

本研修プログラムに対する評価は、卒後臨床研修センター、教室運営会議、関連病院医長会、指導医および各研修医によりなされる。評価の内容はプログラムの改善に生かされる。

VII その他

慶應義塾大学病院初期臨床研修医全員を対象とした症例検討会、セミナー、講演会（いずれもWEBを含む）を不定期に開催している。